

簠簋抄を修訂する・続考

はじめに

『簠簋抄』は陰陽師阿倍の晴明を狐の子とする（しのだ妻）説話の源泉として演劇研究者の間で知られるが、本来は曆学書『簠簋』の注釈書である。中世にまとめられた『古今集』あるいは『法華經』などの注釈書は説話や和歌・ことわざなどを多用して達意を計ろうとするが『簠簋抄』もまた例外でなく、竜宮で得た霊薬によって鳥語を解する（聞き耳）や和漢の力自慢が争って共倒れになる（仁王と賀王）など有名な昔話の利用が見られたりする。

『簠簋抄』には古い伝本がなく寛永初年の刊本が溯り得る最古の例となる。寛永四年刊古活字版、無刊記古活字版、同六年刊整版の三種が踵を接して出版されるのであるが、

渡 辺 守 邦

この三種を[A本]・[B本]・[C本]と呼ぶとき、[B本]は半丁を一行で組む[A本]を一二行に組み直したもの、[C本]は[B本]を板下にルビ・返り点などを挿入した覆刻加點整板であって三本の本文に大きな出入りは認められない。ただし表記に関して[A本]はきわめて自由奔放であり、正字と異体字との混用、あるいは少異字の安易な利用が目立つ。その種の奇妙な表記が[B本]・[C本]によって指摘修正されて今日見る『簠簋抄』に到達するのであるが、その修訂の実体を前稿^{（主上）}で検証してみた。その結果は、[B本]・[C本]関係者の努力にもかかわらず、いまだ完璧と評するまでには達していない。本稿は[A本]の奇妙な表記を分析することによって改めて[B本]・[C本]による修訂の原理を析出するとともに、その方法を援用して修訂作業をさらに進めてみようとするもので

ある。

※

『簠簋抄』は第一冊の冒頭に「由来の章」とでも名付けるべき章を設けて、暦字の秘書「簠簋」すなわち「金烏玉兔集」の伝来に清明がいかに関わったかを物語る。常陸国猫嶋生まれの童子が時の帝の重病を救い清明の名乗りを賜るのであるが、そのあたりを適宜句読点を補いながら[A本]に従って引用してみる。

折節清明ノ比ナル故、彼博士ヲ清明ト^(マ)倫言有ニ依テ即博士ノ名ヲ清明ト号也。清明トハ三月ノ節名也……子々殊々清明ト名乗テ……彼清明カ母ハ化來ノ人也……今ノ清明誕生有……故ニ清明上落ノ砌……清明者博士一道自然智ニシテ天下ニ名ヲ馳スト^云。清明穀山ノ坂本ニ居住シテ……清明者吾カ身上ヲ毎日占テ……清明カヨシヲ問。市人ノ云、清明此井日自以前(上^(注2)7ウ)

この先さらに内裏の白洲に於ける薩摩の道満との智慧比べへと続くのであるが煩を厭って略す。

ここに登場した清明は大膳大夫安倍益材の子、従四位下穀倉院別当天文博士安倍晴明のことであるが、物語や演劇

の世界の常として、二十四節氣のうち三月の節に因むという清明の字が当てられる。

右の引用は諱の拝領から道満の上洛までを圧縮したもので、原文では二丁分のスペースを占めるが、その間に清明の名が十数回繰り返される。ヒーローの紹介ゆえ頻度の増すことは避けられないものと納得するが、「清・清」の混用が煩わしく、またこの二字にいかばかりの違いを託しているのかも分からない。因みに[B本・C本]とも右のすべてを「清明」に統一して例外はない。

[A本]にはこれに類する不思議なあるいは奇妙な表記、表現が目立つ。いま、任意の一丁(上冊第八丁)を限って、混乱とも評すべき表記を指摘してみると、こんな風になった。

- ① 其末殊仁王七十四代鳥羽院ノ御時代ヨリ[B本・C本]に「孫・仁」※^(注3)「人皇」
- ② 權化甞來ノ人[B本・C本]に「權」
- ③ 戀クハ尋ネ來テ見ヨ[B本]に「戀」
- ④ シノタノ森ノウラミ葛ノ乗[B本・C本]に「葉」
- ⑤ 搜消様ニ失ニケリ[B本]に「搜」
- ⑥ 清明上落ノ砌[B本]に「落」
- ⑦ 母ノ様子ヲ析精スレハ[B本・C本]に「誓」
- ⑧ 古老經タル狐ネ一疋[B本]に「狐」

引用に当り可能な限り原文の表記を復元するように努めて

みた。

まず最初に、不審あるいは不思議と思われる表記を抜出したこの表から除外しておくべき例がある。たとえば⑧の「祈精」。これは信田の森へ赴いた清明が社頭に祈りを捧げる場面であるが、他にも、

此度他國ノ命終通給ヘト祈精不淺シテ(上4才)〔B本〕に「祈誓」。^{キセイ}〔C本〕に「祈誓」

という用例がある。遣唐使吉備大臣が無事の帰国を長谷の観音に祈る場面だが、両例とも〔B本〕に「祈誓」と改め、〔C本〕もこれに従う。しかし「祈精」を誤植とするのは適切でない。〔易林節圃〕に「祈誓 キセイ」「祈精 キセイ」「祈請 キセイ」と多様な当て方を容認するその一つとして採用されているからである。⑦の「上落」もまた同じ。この表記は節用集の採録するところではないものの、室町期の文献に実例としてはしばしば見かけるところであり近世初頭に至るまで堂々と罷り通った(誤り)である。

残りについては、不思議・不審の種類の違いにより、いくつかの固まりに分けることが可能なのである。その第一は単純な誤植。①「仁王七十四代鳥羽院」あるいは⑤「シノタノ森ノウラミ葛ノ乗」等である。第二は異体字のサークルで①「末殊」、②「權」が一固まりをなす。それぞれ「孫」「權」の異体字である。異体字はそれ自体が不思議でも不

審でもないが、〔A本〕の場合、問題を他のページにまで広げると、「答・荅」「役・役」「逃・逃」「勅・勅」「土・土」「鶴・鶴」などと異体字と正字との併用が目立ち、「兔・兔・兔・菟」「到・致・致」と複数の混用さえ出現する。この傾向も不思議の一つであろう。

第三に、正字から点画を端折った奇妙な字体があつて一群をなす。④「戀」、⑥「搜」、⑨「狐」などである。端折るとは、たとえば④を例にとれば、「戀」という字を形成する「糸・糸・し・言・心」という(パーツ)のうち「糸」が「么」で止まっている。これは偶発のミスではなく、

戀暮ノ思二更二不願人無之(上9ウ)

而二神宮后宮ヲ奉見戀暮ス(中42ウ)

と熟語にも及ぶ。玉藻の前の美しさに万民が魅了されたという箇所と干珠満珠を持参した竜宮の使者があらうことか神宮后宮(神功皇后)に一目惚れしたという箇所とである。この「糸」を「么」で済ませる省エネは「戀」だけに止まらず、

第四ノ八獄擧神ニ當ト云也(中18ウ)〔B本〕に「率」。

〔C本〕に「率」

と「擧」にも波及する。その数は右の引用を加えて都合五例、その全てを「擧」として「戀」に同調する。この趨勢はさらに、

團クワント者、已上ニ未開空劫ノ事ヲ云也（中1オ）〔B本に「團」〕。〔C本に「團」〕
というおまけを伴い、

悉東國ノ蠻ヲ退治シ給也（中45ウ）〔B本に「蠻」〕。

〔C本に「蠻」〕

というお土産が付く。ただし、同じく「戀」とツクリを共有する「變」は全ての用例を本字で表記する。

⑨「狐」も「瓜」が一画足りない。『簠簋抄』では狐は人気のある動物で登場回数も掲出の例を含めて一〇例に達するが、すべてツクリを「爪」とする。別に異体字を当てる例が一箇所あるが、これも義理堅く、

彼狐殺シツル後血カ那須野ノ原ニコホレテ（上13オ）

と歩調を合わせてツクリを「爪」にする。さらに捜してみたところ、次の例が見つかった。

鰥寡孤獨ト者……孤ハミナシコ親ナキ者（上序8ウ）

〔B本に「孤・孤」〕。〔C本に「孤・孤」〕

もう一つ⑥「搜」が残ったが、これを③や⑨と同日に論じることにはためらいがある。〔C本に「搜消様ニ」〕とルビを振るが、これは「搜」を「パーツ」が欠けて空洞化した「搜」字と理解したものであろう。しかし「搜消」では重箱読みになって不自然さが残る。「搔搜ふ」のコンタミネーションに発する単なる誤植かもしれない。

〔A本において思いがけない展開を見せたこのパーツ不足の奇妙な文字のその後、つまり〔B本・C本〕の対応やいかにいえば、

③「戀」は全例を「么」のままで引き継ぐが、派生する「率」「蠻」は「率」「蠻」と通例の字形に修訂される。

⑤「搜」は〔B本・C本〕にこの字形のまま引き継がれる。

⑧「狐」も同じく「爪」のままの字体が引き継がれ、「狐」「孤」は正字にもどされる。

このように規律に乱れが生じ、グループとしての結束が崩れる。

ついでながら②の「𠂔」について触れておきたい。「𠂔」は②以外に、

清明蘇生ノ後𠂔治シ給書ナル故處々口傳等有之（上16オ）〔B本・C本に「𠂔」〕

という用例もあるので「𠂔」のつもりなのであろう。この字形は黒本節用・天正節用・饒頭節用などが「再会」「再発」「再興」の「再」に当てる「𠂔」に近似する。またいまだ実例にお目にかからないが「爾」の異体字にこの字があるともいう。そのいずれであつても「再」との関係を確認することは難しいであらう。

以上に述べてきたのは〔A本〕の第一冊第八丁に見る不思議

な字形や表記についてであったが、その数とバラエティーの豊かさに驚くものの、採録を無作為に開いたページに限定したゆえであろう、少異字という不思議に触れることができなかった。

※

少異字とは形状の類似した文字相互の関係をいうが、本稿では解釈を若干拡大して、字形の近似に起因する表記の乱れの意味で使う。前稿では[B本]の少異字として「驥・驢」「焉・寫」「鍛・鍛」の三例に絞って採りあげ、検討したが、例の数が少なく説明も不十分なままに終わった。ここに改めて少異字を採りあげてみることにして、何はさておき実例を見てみることにしよう。

- ① 先此書者……文殊結集シ給ト可意得者也……大聖文珠ニテ御座也。彼文珠堂ニテ此書ヲ皆文珠ヨリ伯道相傳有也。其後共命鳥ヲ正文珠ヨリ伯道ニ借給（上1オ）《B本・C本》に「殊」
- ② 鼈者蛙ヲ可欽トス。蛙者飲レシト戰（上7オ）《B本》に「可飲」。《C本》に「可レ飲」
- ③ 千金ヲ午ニ取ルト夢見ルトイヘ共夢覺テ更ニ无之（上15オ）《B本・C本》に「手」

- ④ 此皮ニテ大鞍ヲ張り二六時中時ノ大鞍ヲ打セ給ヘ……大鞍ノ打様ト者（中「七八」オ）《三本》に「鞍」
- ⑤ 弓箭八満ノ本地ハ阿弥陀、正八幡ノ本地ハ正觀音也。若宮八幡ノ本地ハ十一面也。此故ニ八幡ヲ祭ニハ（中45オ）《B本・C本》に「幡」

少異字は文字の外形の類似によって生じる誤植、誤写であり、前後の文脈と微妙に階調のずれるところから見つかりやすく、また正字を類推しやすい。右の引用に傍線を付けた箇所が少異字による誤りと思われるが④以外はすべて[B本・C本]により正解を見抜かれている。

しかし[A本]の少異字マジックを見くびってはならない。次の一文などいかがか。次の例は小空亡日が凶日であり行いを慎まなければならない由縁を説く。そこで問題、次の文中に少異字による誤りもしあらば指摘せよ。

太歳神南門ノ番ヲ諸悉鬼至テ惡鬼也。兩角央ニシテ如夜叉^文尖ト者眞直ニシテ次第小成ヲ云也。夜叉ト者男鬼神也。髮短ク口廣ヲ云也。此諸悉鬼人家ノ牆壁一寸モ有處ニハ居シテ人間ノ作業等ニ依テ致萬事障導也。其障導ト者佛神ニ富貴ヲ祈レハ貧ニ成給ト申、無病ヲ祈レハ病者成給ト申、何モ如此申替ルニ依、不成就日ト云也。故ニ一切ノ事ニ凶之。是佛名寸善尺魔。

是ヲ晝夜ニ配當ノ事、朔日ノ晝ルニ諸悉鬼神當、朔日ノ夜ハ諸災鬼ニ當、二日ノ晝ハ諸悉神ニ當、二日夜ハ諸悩神、三日ノ晝ハ諸首鬼、三日ノ夜諸病鬼ニ當也。依テ一晝四夜八晝等ト者、諸悉鬼ニ當處不成就ト云也。何モ如右勘テ諸悉鬼ヲ可簡也(中52オ)《三本》に出入りなし》

これは難問である。そもそも文章が錯綜して文意が滞る。
[B本・C本]もこの錯綜はお手上げだったらしく修訂なしのフリーパスである。この一文を読み解くためには、本末転倒、註解される側の『簠簋』本文の手助けを必要とする。

一晝 四夜 八晝 十一夜 十五晝 十八夜

二十二晝 二十五夜 二十九晝

右今小空亡日者、太歳南門番神也。爰七人有之。

所レ謂諸悉鬼、諸災鬼、諸悩鬼、諸苦鬼、諸

病鬼、諸疾鬼等也。第一諸悉鬼者惡鬼也。兩角尖

如二夜又^ニ有^テ二人家牆壁^ニ下^ニ致^ス一萬事障導^一。故尤

厭^レ之魔王者也。

これが『簠簋』卷三22「小空亡日」の全文であり、ついであるが論旨をかい摘まめば次のごとくである。すなわち、牛頭天王の第一王子太歳神の宮殿に四門があり、南門は諸悉鬼、諸災鬼以下七人の番神が昼夜の半日交替で警護に当たるがその一番手の諸悉鬼は人間界に下って何かと障碍を

与えたがる鬼神、小空亡日とはこの諸悉鬼の勤務する朔日昼・四日夜・八日昼……二十九日昼のことで、この半日は万事が不成就の凶日である、と。

ここで少異字のエクササイズにもどって、その正解は、二日昼の番神「諸悉鬼」の「悉」を「患」に改め、問題文中のそれ以外の「悉」をことごとく「恙」に訂す、である。他にも二日夜の諸悩神は「悩↓苦」に、三日昼の諸首鬼は「首↓悩」に正す必要のあること、四日昼の諸疾鬼の名前を欠くことなどを言い添えたならば満点であろう。諸悉鬼を恐れるのは人々が穴居していた昔、種々の禍疫をもたらしたツツガのイメージが重なるかららしい。

次に少異字の垂流変種と呼ぶべき一群に話題を移す。この類も以下に示すように[A本]に数が多く、また多様である。

①類拜稽首シテ祈念仕(上4オ)《B本・C本》に「稽」

a 百日稽古シテ彼二責入(上12ウ)《B本》に「稽」

[C本]に「稽」

②數日ヲ經レトモ搥シテ无咲事(上11オ)《B本》

[C本]に「搥」

③始メテ笑時キ二百ノ嫺有テ(上11オ)《B本》に「媚」

[C本]に「媚」

④手足ノ奉公者涇分可申(上14オ)《B本・C本》に「渥」

⑤龜負來ル故ニ魚養ト名付テ能輸也(上序3オ)《B本》

に「翰」。〔C本に「翰^ガ」〕

⑥ 屑之彈舌ト者、屑ヲトリカネアサマシヤト思召歸給
ヒ腸ヲ立舌ウチシ給事也（上序7ウ）〔B本に「屑
・屑」。〔C本に「屑^キ・屑」〕

⑦ 天ヨリ來ルハケ物ヲ娼ト云、地ヨリ出ヲ藥ト云也（上
序13オ）〔B本に「藥」。〔C本に「藥^ツ」〕

⑧ 五節等違則、三毒ニ娼ル巨旦カ類ト思召疫病等ヲ與
ヘ給ト云（上序14ウ）〔三本に「娼」〕

①は吉備大臣が無事の帰朝を長谷觀音に祈る場面、玉藻の
前退治の場面にもこの字が使われている。②と③は絶世の
美女褒姒の容貌、④は伯道に入門するに当たつての清明の
誓い。〔下〕に「涯分 ガイブン 随分儀也」とし〔目〕に
「Gaibun ガイブン（涯分） 副詞Zuibun（随分）に同じ。
注意深く。熱心に」とある。「涯」は「涯」のつもりなの
であろう。⑤は父親の吉備大臣を追って唐から海を渡って
きたという朝野魚養の伝説、⑥以下については別に説明す
る。

このグループを變種と呼ぶ所以は傍線の文字が漢字の規
格から外れていることに依る。①は「稽」の少異字と思わ
れるがパーツの「旨」を「首」とし、②も「摠」の「勿」
を「亡」に作るが、このような字体を字書に搜し出すこと
はできない。字書に載らない外字ではあるものの〔B本〕・

〔C本に「稽」「摠」（「惣」の異体字）と正されているとこ
ろからすると、大袈裟に騒ぐほどの變種ではなかったらし
く、少異字の亜流とするぐらいの処遇で充分であろう。た
だし筆写の場合ならば書き間違ひとかスペル・ミスとして
扱われるはずの怪しげな文字に正確に対応する活字を備え
ていた〔A本〕工房の怪しさには驚きを禁じ得ない。ここに引
いた外字以外にも、「衲衣」（中4ウ）とか「德海」（中11ウ）
「雌鷹」（中39オ）なども活字ケースに用意があった。

⑤までは〔B本〕・〔C本〕の訂正がほぼ的を射ていたが、⑥
⑧の三例に至って自信喪失の雰囲気が漂う。実はこの三例
は『簠簋抄』に先立って『簠簋』本文に、

⑥ 屑^{ヤトホシフシテ} 彈^{シテ}舌（卷一〔牛頭天王序〕）

⑦ 有^シ何妖嬖^{ノヨケツ}哉^ヤ（同）

⑧ 耽^テ三毒^ニ（同）

と、同じく怪しげな雰囲気を纏って使われていた。いま引
用に当たつてルビや返り点の付くことを喜んで寛永六年右
衛門刊の整板本『簠簋』を利用したが寛永四年刊の〔A本〕と
は年次的に倒錯する。それゆえより適切な伝本に切り替え
てみる。

		⑥	⑦	⑧
A本	肩	藥	𪛗	𪛗
B本	肩	藥	𪛗	𪛗
C本	肩 ^キ	𪛗 ^ツ	𪛗	𪛗
D	肩	藥	𪛗	𪛗
E	肩	藥	𪛗	𪛗
F	肩	藥	𪛗	𪛗

Dは『簠簋』の寛永三年刊の古活字版、Eは慶長一七年刊の古活字版、Fは慶長十六年の写本（新城文庫蔵）、この三本をもってA本刊行直前の状況を再現してみたつもりである。この表を参考にしてこの三例の正解は探ってみるとうしよう。⑧はDの「𪛗」が正解であろう。⑧はもう一箇所、

阪路ノ時三毒ニ𪛗巨旦ヲ退治シ給（上本15才）

という用例があり、こゝも「𪛗」で通じる。⑦は「天ヨリ來ルハケ物ヲ𪛗ト云、地ヨリ出ヲ𪛗ト云」（A本）という文言から推して「𪛗」が正解であろう。そして⑥の「𪛗」は素直に「𪛗」の別字と受け取り、𪛗𪛗の情に乏しい巨旦大王、の意味で通じるように思うがそれほど単純なものではないらしく、右の引用のほかにも『簠簋』の室町ごろの写本（会津吉祥院）に「𪛗^{（注）}𪛗^{（注）}」に「𪛗^{（注）}𪛗^{（注）}」の室町ごろの写本（五季文庫B本）に「𪛗^{（注）}𪛗^{（注）}」、天正八年写本（新城文庫）に「𪛗^{（注）}𪛗^{（注）}」、桶裡に「𪛗^{（注）}𪛗^{（注）}トハ借レ宿雇イタル无^{（注）}𪛗^{（注）}𪛗^{（注）}」、𪛗スホ〜トシテ𪛗リ給𪛗也」とあって絞り込めそうにならない。「𪛗」か「𪛗」か「𪛗」か、はたまたヤドかヤトイか、

転写を重ねる間に、復元が不可能なまでに表記が變形してしまつたようだ。A本には『簠簋』のそんな金属疲労のよくな表記も流れ込んで𪛗やかしに一役かっている。

異体字と正字を混用して少異字を頻発し規格外の字形を許容するA本の表記・表現を自由奔放あるいはバラエティ豊かと評したが、少異字が外見の類似に基づく誤字であり、もし外字が活字を草稿本の手書き文字の字形に合わせようとした結果に過ぎないとしたならば、A本の過誤であり不備以外の何ものでもない。

ここに明らかになったA本の〈欠陥〉は多くが室町期の言語習慣を背景に持つものと思われ、過誤や不備の依つて来る由縁を追究する魅力に抗いがたいが、恐らくそれは古活字版の出現によって手書き文字と活字との間に生じた軌轢に触れることなく済む問題ではない。

それゆえ、いまここでは、B本・C本が異体字や少異字をいかに処理しようとしたのかに焦点を絞つて考えてみることにしたい。A本の奔放でおおらかな表記の処理に用いた方法を探り、その響みに倣つてテキストの修訂を試みてみようとするのである。

※

次の一文は貧女の依頼で仏像を修復した箔打師が仏弟子迦葉に転生したという一話からの引用である。

他ノ下女ノ水汲ト談シテ薄佛^{ハク}再興ノ故也（中31オ）

《B本に「興」。C本に「興」》

毘婆尸仏の昔、路傍の仏像の退廢を歎いた箔打師が水汲みの貧女の協力を得て色鮮やかに修復、その功德に九十一劫のち迦葉と生まれたとする。この話は仏典に出自を持ち、たとえば「法華文句」では迦葉に転生するのはわが身を売って箔を入手しようとした水汲み女である。それはさておき、右の一文のうちの「薄佛再興」をB本は「薄佛再興」に書き換えた。その理由は「再興」は「再興」の誤りと気づいたから、という単純なものではなさそうだ。まず「奥」という表現に違和を感じ、異体字や少異字を普く探つて「奥」にたどり着き、「奥」を経由して「興」に到達した、という経路が浮かび出る。そしてこの推測を真正範圍の「再興 サイコウ」という表記が支持する。「奥」は「興」の異体字なのである。

この例において訝しい表記の解明に異体字の知識が役立った。次の例はこのアイデアすなわち異体字媒介の有効性を立証するもののようである。ただし考察の過程に手抜きがあつて、九仞の功を逸している。

天文博士が星辰の異変を直接帝王に奏上する制度を天文

密奏というが、その密奏に関連した一話である。

大唐モ漢ノ光武ノ御世ニ原子陵ト齊ノ文叔ト古同學ノ時知音兄弟ノコトシ。有時列ノ文叔ハ帝王ト成給。又原子陵ハ渭水ニ鉤スル所ニ漢ノ光武ト者列ノ文叔カ事也。彼漢ノ光武渭水ニ御幸成給テ原子陵ヲ大裏ヘ召シツレ給故ニ、其夜五方ノ星悉落星傾拔ス（上序2ウ）

《B本・C本に「齊・齊」》

文章にギクギクした部分があつて意味を通りにくくしてはいるものの、文叔と名乗る若者と原子陵とは遊学の苦楽を共にした仲であつたが、やがて文叔は皇帝となり、渭水のほとり（貧相な身なりの）原子陵と再会、内裏に召し連れたその夜に……、の意味である。この例は再度のお目見えて、前稿ではA本が「原子陵」と誤りB本が踏襲した人名をC本が「嚴子陵」と正した、その見識を称揚するための掲出であつた。今回は知音の「列ノ文叔」を問題とする。「文叔」は後漢の世宗光武帝の字「文叔」として問題なからうが、「列」が分からない。

嚴子陵が参内した夜、星が運行を乱したという逸話は『後漢書』隱逸伝に載り、故事として広く知られ、詩材として利用された。中本大氏^{（注5）}によれば「子陵釣台」の詩もその一例という。「子陵釣台」とは、

万事无心一釣竿 三公不_レ換此江山

平生恨識刘文叔 惹_二得虚名_一 滿_二世間_一

という七言絶句のこと、いま中本氏に倣つて『連集良材』の板本から引用した。第三句に「刘文叔」とあるが、「刘」は「劉」の異体字、刘文叔と名乗っていた苦学生のころの光武帝、という意味であらうか。「劉」は劉邦を祖とする漢王室の姓である。先の引用に「列ノ文叔」とともに「齊ノ文叔」という呼び名が登場するが「齊」の正体は不明、「列ノ文叔」を安易に「齊ノ文叔」にすりあわせて「列」を抹殺、キード「刘」に連絡する回路を遮断してしまった。類例を続ける。次は表記に不審を感じたものの解明の手がかりを見つける能わず、不本意ながら[A本]に従つたと思しき例である。

熟[巨]ト者、近クハ於萬物天地陰陽ノ名ヲ付ルハ未開以前空劫迄ヲ深ク親ルト云義也(中1オ)《B本》に「熟巨」。

〔C本〕に「熟_{ツラクヨモンミルニ}巨」

これは卷二の発端で、『簠簋』の、
熟_{ツラクヨモンミルニ}巨、天元無_{トク}容貌_ニ地亦非_レ有_二形象_一。

という冒頭を対象に施した註解である。「近クハ於萬物」云々とは、むしろ「天元無_{トク}容貌_ニ」以下に相当する内容であつて、「熟巨」の語注としてふさわしくない。「熟巨ト者」と「近クハ於萬物」との間に脱文があるか。「熟巨」

は〔C本〕のルビが示唆するように、ソモソモとかサテモソノノチに類する、いわゆる発語であらう。念のため言い添えれば『簠簋』卷一の発語は「倩以」であつて、これは〔天正・饒頭・易林節圍〕に「倩 ツラク」とし、〔易林節圍〕に「以 オモンミレハ」とするところからして表現に問題はない。いっぽう「熟巨」は〔天正・饒頭節圍〕に「熟 ツラク」とあるものの「巨」の素性について、はかばかしい反応に出合わない。それゆえ他にヒントを求めてみる。『簠簋』卷二の発端は右に見たように「熟_{ツラクヨモンミルニ}巨」であるがこの引用は寛永六年衛門板の本文なので参考にならない。寛永四年以前の諸本はいかにと中村璋八氏『日本陰陽書の研究』(注6)所載の対校一覧を調べてみたが、こんな些末な異同は採りあげない。それゆえ手の届く範囲の写本を当たつてみたところ、次の例が目にとまった。

熟_{ツラクヨモンミルニ}巨_レ天元無_{トク}容貌_ニ地亦非_レ有_二形象_一

東北大本(永祿二写)である。他にも、

熟_{ツラクヨモンミルニ}巨_レ……国会図書館新城文庫本(天正六写)

熟_{ツラクヨモンミルニ}巨_レ……会津吉祥院本(室町期写)

熟_{ツラクヨモンミルニ}巨_レ……五季文庫B本(室町末写)

なども見つかった。比較的早い時期の伝本に用いられているようだ。

ところで「巨」とは何ものか。その答えが〔会玉〕にあった。

以 イ 余止切 用也。^{モテ}又為也。ヲモンミル。固作巨
(三六ウ)。

「巨」は「以」の古字なのだという。そして「巨」を「以」の異体字として読み替えるならば、「熟巨」は〈誤表記→異体字→正字〉という回路にそのまま乗る。

※

[A本]は『簠簋抄』の現存最古の伝本であるが室町期の日常的な表現の名残を色濃く残しているらしく、異体字と正字の混用や少異字に基づく表記の乱れなどが目立つ。本稿はその実体を紹介し検討を加えてみた。この先さらに〈乱れ〉の依って来たる由縁を検討して「失敗の本質」を糾すべきなのであるが、『簠簋』自体のテキストクリティクが充分でない原状にあつて、これは近世文学研究の徒の任に耐えるところではない。

その代りとして、[B本]による[A本]の誤訂に注目してこの方法を分析した結果、誤表記の解明に、外形の類似する表現の探索範囲の内に正字だけでなく異体字をも加え、

誤表記——異体字——正字

という回路の利用があることを見出し、この方法を利用して[B本]の見落しを補う試みを行ってみた。

このようにして、[B本]による修訂をさらに深めることにより『簠簋抄』本文の、更なる浄化が期待できるもののようなのである。

注

(1) 「簠簋抄を修訂する」〔實踐國文學〕九八 二〇二〇・一〇)

(2) 第一冊第七丁ウラ面を意味する。なお[A本]の構成は次のごとし。漢数字は丁付で、飛び丁が中冊巻第二と下冊巻第五(文珠曜宿経)とにある。

上冊 〔由来〕 一〜十六

〔牛頭天王序〕 序一〜序十四

卷第一 本十五〜本二十

中冊 卷第二 一〜六・七八・九〜二十一

卷第三 廿二〜五十二

下冊 造屋篇 一〜八

文珠曜宿経 九〜十八・十九二十・廿一

五帝龍王戦之事 廿二〜二十四

(3) 四角で囲った参考文献についてここに一括して説明する。

〔運歩〕 運歩色葉(安田章氏『天正七年本運歩色葉』昭

和五二 臨川書店)

〔易林節用〕 易林本節用集(中田祝夫氏『古本節用集六

種研究並びに總合索引』昭和四三 風間書院)

〔下学〕 下学集 (山田忠雄氏『元和七年板下學集』昭和

四三 新生社)

黒本節用 黒本本節用集 (中田祝夫氏『古本節用集六

種研究並びに總合索引』)

天正節用 天正本節用集 (豊島正之氏『天正一八年本

節用集』二〇一五 勉誠出版)

饅頭節用 饅頭屋本節用集 (中田祝夫氏『古本節用集

六種研究並びに總合索引』)

〔日葡〕 日葡辞書 (土井忠生氏ほか『邦訳日葡辞書』

一九八〇 岩波書店)

なお〔陰玉と欄〕については前稿末に説明した。

(4) 久野俊彦・小池淳一氏『簠簋傳・陰陽雜書拔書』(二〇一〇

岩田書院) に影印所収。

(5) 中本大氏「聯珠詩格は『新選集』の典拠か——『連集良材』

所収、載復古「子陵釣台」詩を發端に——」(『立命館文学』

二〇一三・六)

(6) 中村璋八氏『日本陰陽道書の研究』(昭和六〇 汲古書

院)。「簠簋」の主要伝本の校異がある。

(7) 念のために他本は以下のごとし。

倩以 慶長七写本(龍門)・慶長一六写本(国会新城)・

陽憲本(天理)

夫以 天正六写本(天理)・統類従原本(書陵部)・五

季文庫A本

なお前稿49ページ上段9〜12行を次のように訂正する。

〔乙〕 i類 (a1) (b3) (b5)

ii類 (a2) (b4)

iii類 (a3) (b1) (b6) (b7) (b8)

iv類 (b2)

同じく52ページ下段1行目の「己己」を「己・巳」に、54ペー

ジ下段20行目の「一二オ」を「一二ウ」に訂正する。

(わたなべ もりくに・実践女子大学名誉教授)